

A vibrant, stylized illustration of a beetle with orange and black wings and a black body. The beetle is positioned in the center, facing forward, with a white speech bubble containing the word "HELLO" in bold, black, uppercase letters. The background is a bright yellow field with scattered black dashes. To the left, there are several yellow daisy-like flowers with orange centers and green foliage. In the background, there are orange and red striped patterns and a large, dark brown, textured shape. The entire scene is framed by a blue border with a wavy, scalloped edge. Above the frame, several blue, cylindrical shapes resembling light fixtures are visible. To the right, there are blue, vertical, rounded shapes that look like stylized trees or structures.

**HELLO**

デジタル霊園

「友哉、そろそろ行くぞお」

お父さんに呼ばれて、ぼくは慌ててリビングに向かう。そこにはお父さんとお母さんがそろっていて、テーブルにはアイディスプレイが置かれている。

ぼくはソファアに腰かけて、その一式を装着する。

そのとたん、一瞬にして世界が変わる。

うるさいくらい蝉しぐれ。肌を刺すような強い日差し。青空にそびえる入道雲。

「あつ、ばあちゃん！ おばちゃん！」

ぼくたち家族は、待ち合わせていた二人と合流する。

そして一緒に、三年前に亡くなったじいちゃんのお墓参りに向かい始める――。

生まれたときからデジタルが身近にあった世代――デジタルネイティブ。じいちゃんはその第一世代だったらしい。

いまのぼくたちのようにオンラインでの買い物もSNSでのコミュニケーションも当たり前で、ライフログの記録もはじまっていた。

でも、そのうち、あることが問題になってきた。

人が亡くなったあとに残されるデータのことだ。

WEBやアプリの利用履歴。SNSへの投稿や、積み重なったライフログ。

そういったデータをすぐに削除するのはためらわれる。けれど、いつまでも放置しておくのもどうなのか……。

そうして登場したのが、デジタル霊園という考え方だった。

デジタル霊園とはWEB上に作られる仮想のお墓で、亡くなった人が残したデータを一か所に納めて故人を弔おうというものだ。データはプライバシーに配慮して、基本的には非公開。でも、故人の生前の意思によっては誰でも閲覧できるようになっていたりもする。

昔はそこに、AIを使って故人の人格やリアルな姿を再現しようという動きもあったらしい。けれど、倫理的なところで実現はせず、どのお墓も墓石フォルダにデータを納めるだけにとどまっている。

「さ、行こうか」

お父さんの掛け声で、アバターになったぼくたちはみんなで細い道を進んでいく。

道の片側には高い塀がつづいている。塀の向こうは醤油屋のだと、前にお父さんから教わっていた。

やがて古びた石段が現れて、ぼくたちは一段一段のぼりはじめる。

すべては仮想のものなのに、没入感で汗がじつとりじんでくるような気分になる。お父さんは身体を動かしてもいないのに、ひいひい言って暑い暑いとつぶやいている。もちろん、わざわざ階段なんてのぼらなくなたって、いきなり墓石のある位置にログインすることは簡単だ。

でも、ぼくたちはそうしない。この道を通っていくことも大事な儀式の一部だからだ。

やがて山の半ばの高台に出ると、お父さんが口にした。

「ふう、やっと着いたか」

お父さんは伸びをして、あたりを見渡す。

ぼくも視線をそちらに向ける。

広がっているのは町並みだった。

連なる家の屋根は低くて、ぼくたちが住んでいるような超高層マンションとは全然違う。町を囲んでいる山にも、現実世界では少なくなった緑がある。中にはみかんの木も多く混ざっているんだとか。遠くでは、瀬戸内海が青い輝きを放っている。

ここは、お父さんたちの育った町——そして、じいちゃんの故郷だ。それも、じいちゃんのフィジカルなお墓が建てられている、今のさびれてしまったほうの町じゃない。デジタルアーカイブやお父さんたちの記憶をもとにして再現された、にぎやかだった頃の何十年も昔の景色だ。

普通のデジタル霊園は、生きているあいだに自分で用意をしておいたり、遺言でデザインを指示しておくことなんが多い。月面を再現する人もいれば、芸術家に頼んで斬新な空間を作る人もいたりする。

でも、じいちゃんは生前、自分では何も用意せず、特にリクエストもなかった。だからここは、お父さんたちがみんなで相談して作ったものだ。

じいちゃんが故郷の町をずっと眺めていられるように。

そんな思いがこめられている。

この空間ができて以来、ぼくたちは毎年お盆になるとここに来るのが習わしになっている。施設で寝たきりのばあちゃんも、外国に住んでいるおばちゃんも、みんな一緒にここに来る。

「友哉、お線香をあげてもらえる？」

ばあちゃんに言われて、ぼくは、うん、とうなずいた。目の前の空間をタップすると、四国八十八か所のWEB出張所で買っておいたお線香が現れる。

ぼくはそれを、じいちゃんのお墓の前までドラッグする。指を離すと、煙がくゆりと立ちのぼりはじめる。

ぼくたちは手を合わせて目をつぶった。

風の音だけが聞こえる時間が、ゆっくり流れる。

そのときだった。

「ねえ！」

声をかけられ振り向くと、ひとりの少年が立っていた。

少年は、ぼくに向かって口にした。

「遊ぼうよ！」

その顔を見ながら、今年もぼくはこう思う。

お父さんって、小さい頃からやっぱり変わってないよなあ、と。

目の前の少年は、お父さんが別に作ったアバターだ。

法律では、生きている人が自分の意思で自分に関するものを作る分には、デジタル上に実際の人を再現することが許されている。だからお父さんは小さい頃の自分を再現して、この場所にずっと置いている。

こんな広いところに一人きりじゃ、じいちゃんもきつと寂しい思いをするだろうから。お父さんがいつかそうこぼしていたのを、ぼくはぼんやり思います。

「ねえ、聞いている？」

少年の声に我に返って、ぼくはごめんごめんと口にしかける。

次の瞬間、少年が急に駆けだした。

「先に行ってるよーっ！」



少年はみかん畑の中を突っ切って、山の斜面をのぼりはじめる。  
この空間は、細かいところまで現実がよく再現されている。  
だからぼくは、お墓参りのあとの時間を毎年ひそかに楽しみにしている。  
小さい頃のお父さんと、一緒に虫を捕って遊ぶ時間を。

「待ってって！」

少年の後を追って、ぼくも慌てて走りだす。

胸の中はワクワクでいっぱいだった。

じいちゃんの眠る、この山で——。

今年は何匹、カブトムシを捕まえることができるだろう。